

論文

ヴィクトリア時代と *Wuthering Heights*

—愛の行方へを中心に—

服部 茂

要 旨

社会における、個人の行動様式、行動の決定、人生の選択などは、彼(彼女)がどのような社会形態、制度の下で生きているかによって、ある一面決定されると言えよう。文学のモチーフを考えるとき時代性は不可欠であり、作中人物の描かれ方からその時代性が浮き彫りにされる。

Emily Brontë (1818～1848) は、歴史的からみればいわゆる“ヴィクトリア的なもの”を当時彼女自身、直接享受していなかったであろう。当時、多くの読者は、彼女が著した小説 *Wuthering Heights* (1847) を時代の思潮、風潮、世間の面からも受け入れなかった。それ故、出版当初、批評家たちからは、“反社会的”だと誤解を受け、正当に評価をされなかったのも事実である¹。しかし、Emilyがその時代を十分に認識していたからこそ、この作品がその時代において、ある種「異彩」を放てたと言っても過言ではない。

本小論では、*Wuthering Heights*を通じて、ヴィクトリア時代における社会の仕組みの一端を検証すると共に、この作品における愛の行方へを中心に「愛と反抗」を軸として、作中人物の行動、出来事、人間関係に着目しその社会的、文化的な背景及びその影響について考察する。

キーワード：ヴィクトリア時代、社会制度、文化、愛、嫉妬、誤解、地主階級、結婚、不動産、財産

I

そもそもこの物語は、CatherineがHeathcliffではなく地主階級のEdgar Linton（以下Edgarと記す）と結婚することから端を発し大きく展開する。その物語展開のキーワードのひとつに結婚が挙げられる。召使いのNellyとJoseph，そしてLockwoodを除くすべての登場人物たちは結婚をする²。当然，結婚という制度には，新しい血の系譜が成立し，財産，相続という社会的手続きが行われる。この章では，HeathcliffとIsabellaを含む，CatherineとEdgarとの結婚の経緯を例に取り，ヴィクトリア時代の結婚風潮を，主に女性側の視点から，その男女の社会的，個人的背景について検証する。

E. Frommは，

In the Victorian age, as in many traditional cultures, love was mostly not a spontaneous personal experience which then might lead to marriage. On the contrary, marriage was contracted by convention—either by the respective families, or by a marriage broker, or without the help of such intermediaries; it was concluded on the basis of social considerations, and love was supposed to develop once the marriage had been concluded.³

と結婚と愛の相関性について，ヴィクトリア時代の結婚風潮を説明する。結婚は，個人が個人的に他者を愛した結果の成果ではなく，あくまでも社会的慣習が，個人の愛よりも優先されるというのである。CatherineはEdgarと結婚する理由のひとつに“if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, and place him out of my brother’s power?” (IX) と述べる。Edgarの財産を彼女自身の目的のためではなく，彼の財産の一部を使いHeathcliffを立ち直らせ，悪い状況から抜け出させる意図があった。結局，それは実現しなかったが，そこには彼女のHeathcliffに対する真の愛がEdgarよりも感じられる。

上流階級にとって結婚とは，子孫を残し，家系を絶やさず，引いては先祖から引き継がれる財産，土地，権威，権力，文化，伝統を維持していくことを意味する家系の強力な維持装置としての役割を果たす一面を持つといえる。CatherineがEdgarを結婚相手に選ぶこと（Catherineの結婚に対する考えに対して，その認識の甘さをNellyは“you (=Catherine) are ignorant of the duties you undertake in marrying” (IX) と指摘する）は，彼女の立場からするとこの時代において特別なことではなかった。当時の社会は，階級間同志の結婚が慣習であり，半ば常識化していた。Catherineの兄Hindleyもその経緯はどうあれ，彼らの結婚については“he (=Hindley) wished earnestly to see her bring honour to the family

by an alliance with the Lintons” (IX) といって歓迎している。彼らの結婚当時には、既に存命していなかったLinton家の夫婦も彼らの結婚には異論はなかったことであろう。結婚が伝統、慣習を守ることが一義的である上流社会では、自由に配偶者を選ぶ機会が少ないということが当時の結婚の風潮であるといえる。

Catherineは、Edgarに対して教養、高潔、誠実、自己犠牲、良心、清潔さを見出し、同時に、優雅で上品な作法といったLinton家の文化に憧れと尊敬の念をもつ。Earnshaw家には、決してみられない雰囲気である。ほぼ同じ身分でありながらCatherine自身には経験のない生活であり、実際、Linton家で5週間を過ごした彼女は、見事に“Lady”になってHeightsに戻ってくる場面がある(VIII)。当然、地主階級のCatherineの場合も、そういった社会における結婚の文化が彼女自身に染み込み、無意識的にも地主階級的な考えになっている。Catherineは、“I should only pity him (=Edgar)—hate him, perhaps, if he were ugly, and a clown (IV) と言う。これは、Heathcliffに象徴されるように下層階級に対する軽蔑の念とともに、仮定法で述べるCatherineは、絶対にEdgarはそんなこと（下層的なこと）はないという彼の現実を主観的に表している。彼女は、Edgarが“he is handsome, and young, and cheerful and rich, and loves you” (IX) と述べる中には、理想的なそして快適な家庭をつくり、女性として幸せを追求していこうとする当時の社会世論が映る。ヴィクトリア時代の女性にとって結婚は、生涯最も重要な行事であった。

ヴィクトリア時代にあつては、妻は家庭の精霊であつたがゆえに、理想そのものであり、また結婚が妻たるものにとって職業と同格であり、人生における唯一の選択（心理的には我慢しておさまりきれぬ場所ではなかったが）であつたがゆえに、彼女は理想の追求者でもあつたのである。⁴

ヴィクトリア時代の女性たちは結婚を「職業(コーリング)」とみなす傾向があつた。

また、Catherineは、

‘And he will be rich, and I shall like to be the greatest woman of the neighbourhood, and I shall be proud of having such a husband.’ (IX)

といつてのけ、優越感を満たす。これは、HeathcliffがLinton家の財産と不動産を手中に収めようと計画し、余命が少ないと見込まれる彼の息子LintonとEdgarの娘Catherineを結婚させようと企む中で、Heathcliffは“I (=Heathcliff) want the triumph of seeing my descendant fairly lord of their estates ; my child hiring their children, to till

their fathers' lands for wage” (XX) と述べる。この Catherine の “I shall be proud” と Heathcliff の “I want the triumph” は共に社会制度の上に成り上がらんとする共通の志向が表れている。

Heathcliff は、Edgar の妹である Isabella と結婚する。しかし、Isabella は、Nelly に当てた手紙の中で、

... Is Mr Heathcliff a man? If so, is he mad? And if not, is he a devil? ... I (=Isabella) assure you (=Nelly), a tiger, or a venomous serpent could not rouse terror in me equal to that which he wakens. (XIII)

と言わしめるほどに Heathcliff を恐怖し、さらに “his habitual conduct” (XIII) と述べ日常の Heathcliff の暴力を告白し、Isabella は、Heathcliff との結婚生活がいかに苦痛で苦悩の生活であるかを知らせる。こういった状況に陥ち入っている Isabella も Heathcliff との生活に縛られ逃げ出せずにいる。当時の England では、夫の家庭での権威は絶対なもので、法律も夫中心に整備されていた。

19世紀の終わりまでは、仮に妻が婚家に戻ることを拒否した場合には、彼女を牢獄に入れることができたし、また同じ行為に対して、夫たる者が自ら妻を監禁することもできた。⁵

後に法律が改正されることになるが、ヴィクトリア時代には、Isabella のように、女性には非常な不利な法律の下での結婚を強いられていた面もある。結局、Isabella は、Heights を抜け出し、Heathcliff の下から逃げ去る。Gilbert と Gubar は、Heathcliff と Isabella の結婚について次のように述べる。

*Ironically, Isabella's bookish upbringing has prepared her to fall in love with (of all people) Heathcliff. Precisely because she has been taught to believe in coercive literary conventions, Isabella is victimized by the genre of romance, Mistaking appearance for reality, tall athletic Heathcliff for “an honourable soul” instead of “a fierce pitiless wolfish man,” she runs away from her cultured home in the native belief that it will simply be replaced by another cultivated setting . . . she underestimates both the ferocity of the Byronic hero and the powerlessness of all women, even “ladies,” in her society.*⁶

ヴィクトリア時代と *Wuthering Heights*

Linton家の文化、教養が裏目に出ていると指摘する。Isabellaは、Heathcliffが棲む文化とその実態を見抜けなかったのである。このことは、出身階級の違いからくる文化、生活の質の相違が両者の前に立ちはだかる厚い壁として存在することを示唆する。

さらに父親と子ども関係について、

ヴィクトリア時代を通じて、子どもは父親の所有物と考えられ、離婚成立の際には子どもたちは自動的に父親の側につくまわりになっていたのである。⁷

したがって、Isabellaが亡くなりEdgarが住むThrushcross Grangeに預けられたHeathcliffの息子Lintonがその父親の下へ連れ戻されることになるが、Lintonにとって叔父にあたるEdgarは治安判事とはいえ、これは当時としては当然のことである。Heathcliffは、自分の息子LintonとEdgarの娘Catherineが結婚する際にも当時の社会慣習にものをいわせ、結婚制度を巧みに利用し、財産の相続に成功している。⁸

以上みてきたように、主要人物である、Edgar, Catherine, Heathcliff, Isabellaのそれぞれの結婚までの経緯、その後の生活には、ヴィクトリア朝の社会背景に支えられ描かれているのである。

II

Wuthering Heights は、残酷なまでも「憎」を描く一方、狂恋の「愛」の物語としてその評価は定まっている。ロマンチズム的でありながらリアリズム的でもある愛の形態。ときとして、哲学的であったりする。それらが、読者にとってその愛を読み解くのに難解であったりした。「愛」の形態に特異性が見られるのがこの作品の大きな特徴である。それ故、この作品に関して「愛」をテーマに様々な解釈、研究がなされてきたのは周知の通りである。W. Allenは“the content is strange enough, indeed baffling enough; while the artistic expression of it is flawless”⁹と述べ *Wuthering Heights* の特異性を認めつつ評価する。また、V. Woolfは“There is love, but it is not the love men and women”¹⁰と「愛」の特質についても言及し、S. Maughamは“*Wuthering Heights* is a love story, perhaps the strangest that was ever written, and not the least strange part of it is that the lovers remain chaste.”¹¹と特異性を指摘する。さらに、D. Cecilも“Catherine does not ‘like’ Heathcliff, but she loves him with all the strength of her being”¹²とHeathcliffとCatherine関係の特異性を説明する。そこで、この章では、HeathcliffとCatherineの愛の形態について考察する。

Heathcliffは、Catherineの死の直前に姿を現わしCatherineに対して猛然とつめ寄る。以下は、Heathcliffの胸中を吐露する場面である。

You teach me now how cruel you've been—cruel and false. *Why* did you despise me? *Why* did you betray your own heart, Cathy? I have not one word of comfort—you deserve this. You have killed yourself. Yes, you may kiss me, and cry; and wring out my kisses and tears. They'll blight you—they'll damn you. You love me—then what *right* had you to leave me? What right—answer me—for the poor fancy you left for Linton? Because misery, and degradation, and death, and nothing that God or satan could inflict would have parted us, you, of your own will, did it. I have not broken your heart—you have broken it—and in breaking it, you have broken mine. (XV)

Heathcliffの愛憎入り交じる言葉は、彼自身、愛そのこと自体に激しく苦悩する場面であり、同時にそれは、その時代における社会風潮に対しての強い不信感も込められている。彼は「どんな権利があつて俺を見捨てたのか」とCatherineに詰問する。もともとHeathcliffとCatherineには、二人は一つであると考えているので合理的な社会制度を意味する「権利」という現実の社会的な言葉は二人の中には存在しなかったし、また存在しえなかった。だからこそ、権利という言葉は、二人の仲を裂き彼らを現実の社会に置く。元来、浮浪児であるHeathcliffと地主階級の娘Catherineとは社会通念からも不釣合いの仲であり、身分の違いを超えた次元の高い愛だったはずである。そこには、Catherineの愛の意志が確実にあったのである。階級を超えたところに2人の尊い真の愛が存在したのである。Heathcliffもそうした愛だと確信していたはずである。

Catherineは「あつて欲しい愛」と「必要な愛」を混同してしまっている。HeathcliffとCatherineのふたりの間には「愛」というものに対してすれ違いがあつた。だから、Heathcliffの「どんな権利があつて…」という彼のCatherineに対する疑問には、彼女は当然答えられない。Catherineは、自分の意志と社会がそうさせる意志の区別がつかないまま、その答えを探すべく必死になり混乱しパニックになってしまう。2人の愛の思いは最後まですれ違いのままであった。

Heathcliffの方でも自己の内面と葛藤しつつもCatherineを必死に許そうと試みる。言葉では憎み、態度では彼女を愛そうとする。Heathcliffもこの二重の気持ちに混乱し動揺する。“I forgive what you have done to me. I love *my* murderer—but *yours*! How can I?” (XV) と叫ぶ。このHeathcliffの言葉には、個人ではどうすることができない社会制度から

くる運命、つまり己を殺すもの、それは彼自身甘んじて受けるが、しかし、Catherineを殺すもの（社会制度）を彼は許せないと読み取れる。

Catherineは、EdgarとHeathcliffの愛の相違を次のように比べる。

My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath—a source of little visible delight, but necessary. (IX)

Lintonに対しては流動的、Heathcliffに対しては永遠的愛を示している。この2つの愛の形態は、前者は現実的な愛、後者は理想的な愛である。ひとりの人物の中に2つの愛の形が存在する。繰り返すが、CatherineはEdgarに対しては「あってほしい愛」とHeathcliffに対しては「必要な愛」をもっている。S. MaughamはCatherine, Edgar, Heathcliffの間について次のように述べる。

Catherine was passionately in love with Heathcliff, as passionately in love with him as Heathcliff was with her. For Edgar Linton, Catherine felt only a kindly, and often exasperated, tolerance. One wonders why those two people who were consumed with love did not, whatever the poverty that might have faced them, run away together. One wonders why they didn't become real lovers.¹³

とCatherineとHeathcliffの愛の行方に疑問を呈す。CatherineのHeathcliffに対する愛は少なくとも俗的に傾くものではない。むしろ、観念的な欠かざる精神愛と彼女は捉えていたのである。一方、Heathcliffの愛であれば、Maughamのいう劇的な愛へと発展したかもしれない。

Emilyは、この作品において二つ愛の形態を提示し、単に「愛する」、「愛される」というのではなく、愛の内部を分解して、HeathcliffとEdgar二人の登場人物を通じて複雑に入り交じる愛と憎を詳細に描き、HeathcliffとCatherine二人の愛の苦悩を具体的に表現したのである。

III

この章では、Heathcliffの嫉妬を取り上げ、S. Kernの嫉妬についての論を基に、それが何をもたらしたかを考察する。

Heathcliffを復讐へ導いた感情には、嫉妬、羨望、財産、権威、権力、因襲に対する憎悪の念が含まれている。¹⁴ 彼は既に Catherine と交際している Edgar に対して上記に挙げた感情を体感していた。

... if I (=Heathcliff) knocked him (=Edgar) down twenty times, that wouldn't make him less handsome, or me more so. I wish I had light hair and a fair skin, and was dressed, and behaved as well, and had a chance of being as rich as he will be! (VII)

Heathcliffは、Edgarへの背後にある因襲、伝統という名の相続品（財産、不動産、教養、作法）を所有していることを十分理解している。つまり、裕福な家庭環境からくる育ちの良さ、十分な食事、教養の高さ、言語能力の高さ、といった文化的力を Heathcliffは嗅ぎ取る。こうした人種に立ち向かうために、理論整然とした正論には、暴力は無能であると悟る。しかし、Heathcliffにとって、理屈では解決できない嫉妬心は解消できないままでいた。

Heathcliffは、CatherineをEdgarに横取りされ強く嫉妬したことは想像に難くない。¹⁵ Catherineが結婚によってEdgarの下で生活することは、Heathcliffにとって、Earnshaw氏に拾われるまでの孤児としての生活、Hindleyの辛い仕打ち、野良での肉体労働、Linton家からの差別、偏見といったこれまでの苦痛な出来事を遥かに凌ぐ最大の衝撃であったに違いない。S. Kernの論が、Heathcliffの気持ちを第三者として解説できる。

たとえ恋人は、男が失った主体性を完全には取り戻せないにせよ、強大な力を与えられているので、その愛が他の男に再び向かったとしたら、それは破壊的な力をおびることになる。女が他の男を愛していることを認識すると、男の存在に穴があき、そこから男の生命の血はしたたり出る。嫉妬による失望感や愛の喪失からくるが、その喪失感自体、自己の喪失という、愛の喪失以上につらく破壊的な喪失感に基づくものである。¹⁶ (強調の点著者)

Heathcliffの嫉妬が執念としての破壊的なエネルギーと転嫁され、自己喪失した自分を立て直すためにも復讐へと邁進する。さらに、S. Kernは続ける。

ヴィクトリア朝の人たちは、嫉妬を避けるべき病疾、愛の腐敗、あるいは「悪の伝染病」とみなした。嫉妬に反応して、彼らは拒絶、逃亡、自己憐憫、極端な場合には殺

人や「決闘」という応報を選んだ。これらの反応にある共通点がある。—それは悲しみの源が「不実」な恋人か、あるいは「第三者」へと投影され、したがって、自己の内部に生じた悲しみの源を内省するのを避けたことである。¹⁷

S. Kern は、上記の引用した論を下に Heathcliff と Catherine の 2 人の関係について説明する。「彼 (Heathcliff) は自分の不幸の原因を表面的しか理解できない」¹⁸ と指摘し、また「確かに Catherine がどれほど自分を愛していたのかを知りはするが、その理由もわからない」¹⁹ と分析する。S. Kern の論を要約すれば、Heathcliff と Catherine の愛は、嫉妬がもたらした誤解の悲劇だと主張する。著者もその考えには同意する。確かに、Heathcliff は Catherine が Nelly に Edgar からの求婚の相談の会話の内容を全て聴き終えていない。ちょうど Catherine が “It would degrade me to marry Heathcliff, (IX) と述べたあたりまでである。Edgar と結婚することで、Heathcliff を助け出すことを意図していたことや、“I’m Heathcliff” (IX) と、Catherine が絶叫する場面のところではすでに彼は去ってしまった後だった。彼女の Edgar と結婚する別の意図や、Catherine の Heathcliff に対する想いは知らないままであった。仮に Catherine の会話を Heathcliff がすべて聴いていたならば、2 人とも誤解することなく物語は違った展開になっていたことであろう。そして、Heathcliff が 3 年が経過して Catherine と再会を果たしたときでさえ、彼女は Heathcliff に対しその裏切りを自覚しておらず、後ろめたさもなく会えた嬉しさに歓喜している。当初、Catherine は、Heathcliff の怒りを理解さえしていなかった。

S. Kern も指摘するように、現世では、二人の愛は、すれ違いであった。Heathcliff は、この二人のすれ違いからくる激しい嫉妬によって憎の念をさらに増長させた一方、ある面では、彼自身、己の実際を知る機会と社会で生きていくための処方を与えた。しかしながら、Heathcliff の嫉妬は、Catherine との誤解を解く手掛かりを失わせることになったのである。そこに、この作品の「愛」の悲劇性が存在し、愛の内側が語られる。Heathcliff におけるこの嫉妬心が大きく愛の動向の鍵を握っていたのである。

Catherine は Heathcliff との愛の誤解を解くことなく亡くなる。彼は Catherine との誤解を解くべく “haunt me” (XVI) とひたすら懇願し、地上を彷徨する。その後、Heathcliff は、Catherine の魂の一体を求め行動するのである。

IV

この小論のむすびとして、社会と人をキーワードに、ヴィクトリア時代の社会制度とその時代の人々との関わり的一端をまとめる。J.P. Brown によれば、19 世紀の England で

は、不動産が高い比率で富を支配し、財産と生まれが中心的な役割を果たし、すべての階級が金に基盤をもつようになったという。²⁰ 彼は、18世紀の小説を比較して19世紀の小説の特徴を次のように説明している。

18世紀の小説『トム・ジョーンズ』と、19世紀の小説『エマ』とを比較してみれば、ここに出てきたような社会的区別が非常にはっきりする。『トム・ジョーンズ』の社会はまだ貴族社会であって、そこでは財産と生まれが中心的な役割を果たす。主要人物は全員が地主階級と関係をもち、この小説の世界における道徳的・美的対立関係は、すべてこの集団の内部から発生している。それに対してオースティンの小説では、多くの人物が地主階級の外部から登場する。そして実業の世界で金をもうけたこれらの人びと（あるいは彼らの子孫）が、地主社会の伝統や思い上がりに挑みかけるのである。²¹

*Wuthering Heights*の場合も、ひとりの外部者が、地主階級の財産、不動産を奪うことによって地主階級の人々に揺さぶりをかけた。いわば社会学的小説 (sociological novel) の面としても読める。*Wuthering Heights*は、ヴィクトリア時代がもつ社会性と絡め、その中に、一人の女性を巡る、愛の喪失が引き起こす悲劇性を文学の中で最高値まで押し上げた作品である。財産と不動産の理論的、合法的、知的な横取りはその時代において何事にも比べられない紳士的なお返しである。

Heathcliffの復讐は、一個人を超越し、社会制度そのものに対峙する。それは、彼の身元不明な幼年期、周囲からの理不尽な扱い、成就できなかった結婚を通じて、Heathcliffはその原因を、自分が存在する社会制度に起因すると悟る（3年の失踪後、彼は社会制度に対応する人物として再登場する）。彼は、その失踪後Heightsに戻ってきたのち、Catherineを自分の手に取り戻すために行動するのではなく、自分が育ったHeightsとLinton家のThrushcross Grange両家の財産と不動産を根こそぎ乗っ取ろうと復讐を仕掛ける。財産と不動産は当時、上流社会の社会的権威を最も象徴する独占所有物を意味する。J.H. Millerは、

An economic metaphor of course pervades *Wuthering Heights*. Heathcliff uses his mysteriously acquired wealth to take possession of the Heights and the Grange. He takes possession of them because each thing and person in each household reminds him of Catherine. By appropriating all and then destroying them, he can take revenge on the enemies who have stood between him and Catherine.²²

と述べ、両家 (the Heights と the Grange) イコール Catherine の存在とみため、経済的視点に立ち、Heathcliff が両家を復讐する動機を論じる。また、Gilbert と Gubar は、

His general aim in this part (=the second half of *Wuthering Heights*) of the novel is to wreak the revenge of nature upon culture by subverting legitimacy. . . . he (=Heathcliff) not only replaces legitimate culture but in his rage strives like Frankenstein's monster to end it. His attempts at killing Isabella and Hindley, as well as the infanticidal tendencies expressed in his merciless abuse of his own son, indicate his desire not only to alter the ways of his world but literally to discontinue them, to get at the heart of patriarchy by stifling the line of descent that ultimately gives culture its legitimacy.²³

彼女らは、Heathcliff の復讐は、当時の家父長制社会に対する反発と主張する。社会が伝統、慣習、文化など社会制度を創るとすれば、個人がそれを破壊しようとする。それを繰り返すのが時代とよばれるものかもしれない。

絶大な権力を握る一部の上流階級と、絶望的に固定している労働者階級の中であって、産業革命により拡大して混沌とした中産階級が存在する中で、*Wuthering Heights* は発表された。世間体を気にし、道徳心が強く、リスペクタビリティ (respectability) を重んじる中産階級の人々は、*Wuthering Heights* のような言葉の暴力、子どもの虐待、死、乱酒といった残酷的で、非道徳的な作品を、センセーション小説だと一部批判する人たちが余所目に十分満喫していたという。²⁴ Altick は、「その時代 (ヴィクトリア朝時代) に、皮肉にもセンセーション小説作家は、家庭と家族の聖なる理想像を裏返して、気品のある暮らしの穢れなき表面の裏側に潜んでいる驚嘆すべき大量の許されざる行為を明みに出そうとしていた。」²⁵ と当時の事情を述べる。

Emily は、冷静な目で時代を見つめ、この作品を書き上げたに違いない。時代に敏感であるからこそ、時代に対して正面から時代に反逆する作品に成り得たのである。

註

作品からの引用は全て Penguin Books 版に依る。Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. David Daiches (Harmondsworth : Penguin Books 1985). テキストにおけるその該当する章に関しては、引用文に続く括弧内のローマ数字でそれを示した。

- 1 cf. 拙論「再考 *Wuthering Heights* —Heathcliffの「悪行」を中心に—」(『中京英文学』第17号, 1997) pp.1~15.
- 2 EdgarとCatherine, HindleyとFrances, HeathcliffとIsabella, Linton (Heathcliffの息子)とCatherine (Edgarの娘)の結婚と, 結婚予定であるHareton (Hindleyの息子)とCatherine (Edgarの娘)である。彼らそれぞれの結婚は, 狭い範囲に限定されたり, 近い関係であったりする。
- 3 Erich Fromm, *The Art of Loving*, (New York, Haper & Row, 1956), p.2.
- 4 J.P. Brown, 『十九世紀イギリスの小説と社会事情』, 松村昌家訳 (東京, 英宝社, 1987), p.126.
- 5 J.P. Brown, *ibid.*, p.123
- 6 Sandra M. Gilbert & Susan Gubar, *The Mad Woman in the Attic : the Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*, (New Haven and London, Yale University Press, 1979), p.288.
- 7 J.P. Brown, *op. cit.*, p.124.
- 8 Charles Percy Sanger, "The Structure of *Wuthering Heights*" in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights : A Collection of Critical Essays*, Thomas A. Vogler ed. (New Jersey : Prentice-Hall, 1968), p.21.
C.P. Sangerは, *Wuthering Heights*における法律の正確さを説明した。彼のこの論文は, *Wuthering Heights*の評価を上げるきっかけとなった。
- 9 Walter Allen, *The English Novel : A Short Critical History* (Harmondsworth : Penguin Books, 1954), p.194.
- 10 Virginia Woolf, '*Jane Eyre and Wuthering Heights*' in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights : A Collection of Critical Essays*, Thomas A. Vogler (ed.) (New Jersey : Prentice-Hall, 1968), p.101.
- 11 W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (London : Heinemann, 1959), p.230.
- 12 David Cecil, *Early Victorian Novelists : Essays in Revaluation* (Harmondsworth : Penguin books, 1934), p122.
- 13 W. Somerset Maugham, *loc. cit.*
- 14 cf. 拙論「Heathcliff論—その人生が意味するもの—」, (『中京英文学』第20号, 2000) pp.21~39.
- 15 Heathcliffは, CatherineがEdgarと付き合うことに嫉妬して彼女と口論となる。そのとき, Heathcliffは, 彼女から次のようにののしられる。
'And should I (=Catherine) always be sitting with you (=Heathcliff)? she demanded, growing more irritated, 'What good do I get—what do you talk about? You might be dumb or a baby for anything you say to amuse me, or for anything you do, either!' . . . 'It's no company, at all, when people know nothing and say nothing,' she muttered. (VIII)
これは, 必ずしも彼女の本心ではないが, Heathcliffは, 整然と反論できずその場を立ち去る。彼の胸中はさらなる嫉妬心と, 自分のその気持ちを表現できないもどかしさに駆られるのである。しかも, すでにこの時点で二人は誤解の種を植え付けるのである。
- 16 S. Kern, 『愛の文化史 (下) —ヴィクトリア朝から現代へ』, 斉藤九一/青木健訳, (東京, 法政大学出版局, 1998), p.397.
- 17 *ibid.*, pp.397~398.
- 18 *ibid.*, p.402.

ヴィクトリア時代と *Wuthering Heights*

19 *Loc. cit.*

20 J.P. Brown, *op. cit.*, pp.15～53.

21 *ibid.*, p.19.

22 J.H. Miller, *Fiction and Repetition : Seven English Novels*, (Massachusetts, Harvard University Press, 1982), pp.63～64.

23 Gilbert & Guber, *op. cit.*, pp.296～297.

24 R.D. Altick, 『異貌の19世紀一二つの死闘』, 井出弘之訳 (東京, 国書刊行会, 1993), p.252.

25 *Loc. cit.*